

2021年10月07日

梅津寿一

「習近平体制の本質」(朝日新聞・政治季評)2021.08.19.
～豊永郁子 早稲田大学・国際教養学部教授

中国問題の本質は、

民主主義と専制主義(Autocracy)の戦い、or
民主主義と権威主義の戦い、と言う。

専制主義は、一人支配の意のギリシャ語を語源とし、プーチンのロシア、習近平の中国をひとまとめに語るのには格好の言葉だ。他方、権威主義はロシアはともかく、中国については考えさせられる。

権威主義:1964年、政治学者のホアン・リンスが提唱したのが始まり。

当時、独裁と言えばヒトラーやスターリンの全体主義を意味したが、リンスは戦後も安定的に続くスペインのファシスト政権により穏健なタイプの独裁を見出し、これを権威主義と名付けた。**権威主義は次の4点で全体主義と異なる**——

- ① 経済的・社会的な多元主義、さらに、限定された政治的多元主義が存在する(反対勢力が存在しうる)。
- ② 体系的で精緻なイデオロギーはないが、ある種の保守的な心理的傾向が支配する。
- ③ リーダーの権力は、明確には定義されていないが予測可能な一定の範囲内で行使される。
- ④ 政治的動員は弱く、政治的無関心が広くみられる

上記4点に照らせば、今日の習体制は権威主義ではありえない。

批判勢力は一扫され、起業家も文化人も市民団体も統制され、個々の市民も監視や動員を受ける。中国と習氏の偉大さを説くイデオロギーも誕生した。国家主席としての任期制限を撤廃し、絶対的なリーダーとして君臨する習氏に率いられる中国は「**全体主義中国**」と言ってよいだろう。

ポスト全体主義:リンスが後年、スターリン後のソ連に見出した体制である。それは絶対的な独裁者を失った全体主義体制から生まれる。その特徴は

- ① 政治的多元主義は存在しない(一党独裁が続く)が、社会・経済の一部に多元主義が現れ、体制内の分業化と専門化による多元主義も見られる。
- ② イデオロギーは形骸化するが、忠誠の対象であり続ける。
- ③ 指導者たちは再び絶対的な独裁者が登場することを恐れ、相互にけん制しあいルールを発達させこれに従う。
- ④ 熱狂を伴う動員は起こらないが、社会を統制する手段は国家の手に残っている

これらは、中国にも当てはまる。

中国が民主化しなかった理由は、権威主義の「強靱性」ではなく、ポスト全体主義体制が全体主義の残した党組織や治安機関、国有企業などを用いて社会を掌握していたからだと考える。

中国のポスト全体主義は毛沢東の死後、成立したと考えられる。それは毛の全体主義体制のアンチテーゼであったが、結局、習氏という独裁者の登場を防げなかった。

そして、新しい独裁者は、ポスト全体主義が温存した全体主義体制の統制手段を最大限に用いることで、たちまち全体主義を復活させ得たのである。

では、習体制は毛体制の再現となるのか。中国はもう共産主義体制ではないのでそれは違う。

国家が掲げるイデオロギーには2種類ある――

- ① どの国にも採用可能な普遍的な理念やプログラムを掲げるものと、
- ② 自国に固有の価値観や理想を掲げるものとだ。

共産主義体制は前者だが、今日中国を導いているのは後者である。

戦前戦中の日本のイデオロギーも後者であり、同盟国ドイツもそうである。このタイプのイデオロギーを有する「**全体主義国家**」には特徴的なふるまい、**領土的野心の性質や人権侵害の在り方**などと、陥りやすい陥穽、**合理性の欠如や他国の反応の読み間違い**など、が存在する。これらについては日本とドイツの前例が多くのことを教えてくれる。

備考:ロシアの場合は、ソ連のポスト全体主義体制が既に民主化革命により解体しているため、全体主義化は難しい。独裁者となったプーチンはいくまでも権威主義体制のリーダーなのである。

(2021.08.21.) 梅津記